

**福島原発事故独立検証委員会
ヒアリング内容**

【 福山哲郎 前官房副長官 】

実施日：2011年10月29日

一般財団法人日本再建イニシアティブ



RJIF
Rebuild Japan Initiative Foundation

司会 福山さんについては、もう皆さんご存じですから省略いたしますけれども、現在は参議院の外交防衛委員長をしていらっしゃいます。3・11のときは、ご存じのように官房副長官で、菅総理を支えて大変な難局を乗り切り、一番中心的なお仕事をされた方いらっしゃいます。私も福山さんとのご縁は大分長くなりますが、何しろものすごい勘のいい方で、のみ込みもものすごく早いし、どういうテーマもリサーチが実に徹底しているんです。今回の危機においても、次から次にいろんなスタディグループもつくられて、インハウスで、単なる行政のルーティンから上がってきたものではない、そういう危機に新しい器を自分たちなりにつくったとおっしゃっていました。今日はそういうことも含めて、お話を賜ればと思います。最初に15分か20分お話をいただいて、それから質疑応答に移らせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

福山 ただいま過分にご紹介をいただきました、いま参議院議員をしております福山でございます。今日はこのような機会をいただきまして心から感謝申し上げますし、土曜日のお昼間ということで、大変出にくい中をありがとうございます。

もう長いおつき合いで、ぼくは特に外交関係で大変ご指導いただいております、特に政権交代直後に外務副大臣をやらせていただいてから、本当にいろんな人とのつながりも含めてご指導をいただきました。

その後、官邸に入りまして、私はほとんど菅総理と一緒に官邸外交をやりました。総理は非常にいろんなことを言われていますが、実務的な方で、皆さんは意外かと思われるかもしれませんが、仕事をある程度任してくれる部分が結構あります。生煮えで持っていくと、こんな細かいことまでおれに判断させようというのか、もう少しちゃんと煮詰めて持ってこいと言って、ある程度預けられます。それはそれで僕はやり方としては非常にいいと思っています。ただ、その生煮えの状態が中途半端ですと、菅さんというのは大変勘のいい人で、これはこうしたら政治的にまずいんじゃないかということで、よく我々は「目からうろこ」のような場面がありました。秘書官がよくどなられるとか官僚がよくどなられるというのも、実はそういう場面が多くて、私とか枝野官房長官は総理が怒っている横で、何でそんなに怒るんだと思わないで、「こんな中途半端なことを持ってきたら、そりゃあ、怒るわな」というのがほとんどでした。根拠もなくあまりどなったりするような方ではないですが、総理はああいうタイプですので、報道を通じていろんなところで誤解があったなど、若干気の毒に思っている部分はあります。

私なりに今日お話しさせていただきますが、少なくとも原発事故の直後はほとんど総理と一緒にいました。先ほど申し上げたように外交の現場では、実は452日間の官邸生活で66回の首脳会談をやりました。日本はアメリカ、中・韓、フランス、イギリス等々の首脳会談はしっかり報道していただきますが、それ以外はなかなか国民には伝わっていません。土日を除いて452日間のうちの66回首脳会談ということは、5日に1回ぐらいは首脳会談をしている計算になっておりまして、マルチの会談は15回総理と出ました。

事前の準備から会談で何を成果としてもたらずのかまで含めて、ある程度お前が丸めろ

と言われて、外務省や各省庁と調整をして、事前に総理に打ち合わせをして、会談に臨むというのが基本的なラインでした。このラインが本当に崩れたのは3・11からで、簡単に言えばすべての機能がご破算になった状態でオペレーションしなければいけないぐらい大変な状況でした。あと10分ぐらい話をして、後は質問を通じて若干の間延びした話も途中でさせていただくかもしれませんが、冒頭に3・11直後の話だけさせていただきます。どちらかというと、リアルに皆さんにイメージを共有していただきたいので、そのことだけ申し上げたいと思います。

午後2時46分に地震が起きました。私は官邸の自分の執務室におりまして、テレビの国会中継で参議院の決算委員会をやっていて、閣僚や委員がわーっとざわついているのをテレビで見ながら、すぐに官邸におります危機管理監に連絡するように自分の秘書官に連絡をしました。そして、すぐに官邸の地下にある危機管理センターに緊急参集チームを招集してほしいと危機管理監に伝えてもらったので、その後、私はすぐに地下の危機管理センターに向かいました。(危機管理センターは)かなり深いところにありまして時間がかかりますが、私は階段をずっと危機管理センターまで走りました。危機管理センターの入り口の手前で、国会から戻ってきた枝野官房長官とばったり出会って、2人同時に危機管理センターへ飛び込みました。これが午後3時2分ぐらい前、午後2時57、58分だったと思います。危機管理センターというのは非常に広い天井の高い部屋で、そこにお手元にお配りした何枚目かにあると思いますが、緊急参集チームという、各役所のそれぞれの危機管理担当の局長、特に自然災害担当の局長メンバーが、そのときにはもう既に集まり出していました。これらのメンバーがこれよりもう少し大きな円卓に(ついて)、それぞれの前に緊急電話とマイクがついていて、横の壁を見ると10面ぐらいのでかい画面があって、そこには防衛省がすぐに出発させた緊急ヘリからの映像が流れていたり、NHKを中心とした各テレビの緊急報道の様子が流れていて、そしてそれぞれの電話には、それぞれの役所、関係省庁の下からの報告が逐一どんどん上がってくるという状況でした。

枝野官房長官と私が席についた5分後ぐらいだったと思いますが、総理が飛び込んでこられて、当然その最中に、辞められました当時の松本防災担当大臣も飛び込んでこられていました。20人ぐらいの局長クラスの円卓の後ろには、彼らの部下がそれぞれの役所から上がってくる情報を自分の局長に報告する準備をしていますから、その部屋には常に100人以上の人間がいると。その横にはそれぞれの役所のブースみたいなのがあって、そこには役所の人が出て、その隣のもっと広い部屋の中にサブの部隊がいるというのが危機管理センターです。

当初、何が起こっていたかということ、例えば警察庁の電話には何々地域110番何件、何件、消防庁でいえば何々地域消防車、119番何件、何件、そのうちの火災発見何件みたいなことがぼんぼん入ってきます。国交省でいえば何々道路が寸断されたとか、何々道路が通行止めとか、それから国交省で一番重要なのは鉄道が止まっているとか、脱線はありませんみたいなのがどんどん入ってきます。

気象庁はマグニチュードを最初に発表しますが、その後、余震のたびに震度とマグニチュードを発表します。そのときにはマグニチュードの訂正等も幾つもありますし、津波の予報もありますので、それをそのたびに言います。今の状況をちょっと想像していただければと思いますが、全くもって紙を回しているような余裕はありません。ですから、目の前のマイクに向かって来た瞬間の情報を、救急車何台、何々地域何台、火災発生何件みたいなことをどなります。後ろの部下がみんなわあわあ言っていますし、そっちも電話が鳴りっ放しですから騒然とした中です。

その報告を枝野さんや総理や私が聞きながら、その場でいろんな判断をするというのが最初の10分か15分でした。

そういう状況ですから紙を回すというよりか、その場で判断をするという状況で、午後3時14分、ほぼ30分後ですが、緊急災害対策本部を設置しました。これは当然、内閣総理大臣が本部長です。なぜここで30分かかるといって、私と枝野さんが入ったのは10分後ですから、別にその場で本部をつくってもいいのですが、まだ何もわからないんですよ。被災の状況から何から何までわからないですし、ほとんど緊急電話でしかこちらには来ていませんし、当時は停電、それから通信が遮断されている状況になっていますので、一般的には通信はつながりません。

ですから、とにかく全体がどの程度の被災なのかを見ながらということと、それから各役所が対策本部をつくれれば、大臣にそれぞれ一定の報告を上げなければいけませんから大臣から上がります。そこは一通り一定の時間を経過してからということで、午後3時14分に対策本部を設置しました。そして午後3時37分から最初の本部を開催しました。最初の本部を開催したというのは、要は大臣を全部集めたということです。このぐらいの時間がなければ、各役所がそれぞれの状況を把握できません。5分とか10分で集まれと言っても、何も報告することがなかったら集まってもしょうがないので。

基本的には、総理も官房長官も危機管理センターにいますから、いちいち大臣を集めなくてもいい。各役所もそこに全員そろっていますので。結果としては、大臣にはまず自分の役所に行ってもらって、そして午後3時37分に緊急対策本部を招集していただいた。それが最初のスタートです。これで大体イメージをしていただければ、こういう状況の中で初動の3日、4日、5日が過ぎます。それで結果として午後3時42分、我々でいえば危機管理センターの経産省資源エネルギー庁の原子力安全・保安院のところから、福島第1原発電源喪失、冷却機能停止という報告が上がってきます。

そのときは、全体が何となく緊張感がより上がったというような感じがありました。私は正直にカミングアウトすれば、原発の構造的なものとか、それが一体どういうものなのかというのは当時はわかりません。今はもう皆さんにとって所与のものだと思いますが、わからない状況で、それでも全体としてこれはちょっと大変なことが起こったなという空気がその報告のときにありました。「一体いつになったら電源は回復するんだ」とだれかが叫んでいまして、「調査中です」「問い合わせてみます」みたいな話が保安院のほうから飛

び交ったのは私の中では記憶がありますが、それが最初のスタートです。

あと2、3分で最初の話はやめますが、その後、私は基本的には夕方は二つのオペレーションをしております、一つは電源車の手配。結果として60数台の電源車を各自衛隊から福島原発に送ることになりますが、なぜそんな数を送ったかという、どの道路が行けるかどうか全くわからないからです。1台や2台送って、どこかの道路が途中で壊れていましたとか、液状化していましたといった瞬間にバンザイなので、その状況は回避しなければいけないということで、ありとあらゆるルートから電源車を手配しました。これが夕方の私のオペレーション。

もう一個の私のオペレーションは、首都圏の帰宅困難者に対して、会社の外に出さないでくれとそれぞれの企業にお願いすることと、各役所を通じて帰宅困難者が一時でもいいから集まれる場所、つまり休める場所を確保したいということで、各大学とか体育館とかを含めて、提供してくれるところがないかということを徹底的に情報収集して、それをテレビを通じて流すようにしていたのが私の夕方のオペレーションで、夕方はこの二つでほぼ目いっぱいだったというのが私の実態です。

結果としては、その大きな危機管理センターの横にある小さい会議室のところで、原発のオペレーションは具体的には夕方以降スタートしました。そこには常に総理、経産大臣と、官房長官は全体を見なければいけないのでたまに入ってきて座るという状況でしたが、私、寺田補佐官、細野補佐官。そして午後9時、10時ぐらいから（原子力安全委員会の）班目委員長、そして寺坂原子力安全・保安院院長、そして東電からは武黒さんが——この方の名前だけはどういうわけか頭に入らないんですが——来られていたという状況でした。

武黒さんが東電から官邸に飛び込んできたのは、最初、正確には覚えていないので、午後9時ぐらいだったと思いますが、そのときにはとにかく電源車が必要だということで、その手配を継続してやっていったというのが実態です。これが大体初動のスタートと、全体の始まった雰囲気です。

ちなみに申し上げれば、ベントがおくれたとか、総理が注水を止めさせたとか、さらには撤退を東電が言ってこなかったとか、メディアを通じて具体的に全く違う三本柱というのは私の中ではこういうことです。この3つはもう完全に事実関係として違うということは、今日も後でご質問いただければお話ができると思いますが、こういったことがそれから先3日間ぐらいあったということと、電源の問題については計画停電について、いろんなコミュニケーションの齟齬が東電側とあったというのは否定できない事実だと思います。

今日拝見すれば、聞いておりましたけれども、大変若手の優秀な方々がお集まりだということですし、私も世代が近いかもしれませんので、あまり言葉を選ばずにお話をしたいと思いますし、反省点も含めていろんなことを申し上げたいと思います。ですから、後は具体的にいろんな疑問点についてぶつけていただければと思いますし、専門的なことはなかなか手元が危ういですが、そこもできる限りお答えさせていただきたいと思います。どうかよろしく申し上げます。

司会 福山さん、ありがとうございます。1日目の夜までの状況を非常にビビッドにお話しいただきまして、本当にありがとうございます。時間も限られておりますから、早速ワーキンググループのメンバーから寄せられた質問が40近くありますので、それをクラスターにまとめて読み上げる形で質問させていただきたいと思います。また時間があれば、メンバーからも直接質問させていただきたいと思います。

最初の質問です。3月11日、震災当日の福山官房副長官と菅首相の行動と判断について伺いたいと思います。これはもう既にお話しいただいたところもありますが、あえて読みます。「午後2時46分の震災直後から震災全般と原発の危機について、いつ、どこから、どういう形で報告を受けられたのか。情報が十分に入っていないと菅さんはおっしゃっていますが、その認識はいつごろから生じたのか。それに対してどのような対応を取ったのか。もしくは、取ろうとしたけれども制度上、リソース上の問題でできなかったことがあったのか。その辺について教えていただければと思います」。

福山 今申し上げたとおりですから当初の話は省きます。ただ、原発の危機については、午後3時42分の冷温停止の状況の中では、それがどういった対応を想起するのか、それが例えば何時間後にメルトダウンが起こるのかというようなことまでの認識はなかなかすぐにはありません。当然です。菅さんが理系でお詳しいとは言いながら、なかなかその共有はできないので。夕方以降、午後7時42分に原災法15条事象の通報をします。このときにほぼ冷却機能はすぐに戻らないという認識に立っています。だから、この15条通報になりますので。それで結果としてこの15条事象は東電が判断することになります。東電が判断して、国がそのことについての通報をするというのがたてつけになっておりますので。

16時36分に東電が判断をし、16時45分に海江田大臣が15条通報ということになります。これは基本的には所管大臣の所管省庁のレベルでの議論になります。ここの段階では、正直申し上げまして専門的すぎて、事象に対する認識はみんなないので、これは15条通報で対応しなければいけませんみたいな話で、それは法律的にそうだったら、それでやるしかないという感じです。ここはもう別に普通のレベルです。

ごめんなさい。間違いました。16時45分に東電から経産大臣にその通報があったんです。17時42分に、15条事象等の状況に関する必要な情報の報告を行うとともに、原子力緊急事態宣言に係る上申書を提出します。ですから、午後4時45分に東電から15条通報の話が経産大臣に来て、そして17時42分に非常事態宣言に至るということです。この時点でも何が起こり得るのかということについての明確な説明なり明確な状況は、そんなに明示的に明らかにされているわけではありません。ただし、少しまずいんじゃないかという空気にはなっています。その後、いろいろ言われているように、与党の党首会談等が午後6時過ぎに終わって、そしてこの状況はどうなんだという説明を総理が受けた後、19時に原子力緊急事態宣言を発令します。そして原子力災害対策本部を設置します。そして第1回の原子力災害対策本部を開催します。これが午後7時です。これは先ほど申し上げた午後5時42分の経産大臣の非常事態宣言を受けての話になります。この後からもう現実問

題として、先ほど申し上げた危機管理センターの小部屋に入って、我々は班目さんや武黒さんを含めて議論が始まります。

結果として制度上の問題でいうと、この表を見てください。これから先、関係してくるのはこの表になります。本部をいっぱいつくったとか、大変細かいものをいっぱいつくったと批判を浴びたんですが、先ほど申し上げた午後3時14分の緊急災害対策本部設置は、災害対策特別法に基づく本部の設置です。左側にある原子力災害対策本部というのは、今申し上げたように午後7時に原子力緊急事態宣言を発令した後、原子力災害特別措置法に基づいて設置をいたします。これが実態です。

この本部をつくと自動的に現地対策本部というのが福島県庁内に、そして原子力災害合同対策協議会というのがその下にできてくるという状況の中で動いています。原子力災害対策本部の左側にある統合対策室というのは、後の14日の撤退のときの話です。それから右側にある復興対策本部は、復興基本法に基づいた本部ですから後でできたものです。

先ほど申し上げた緊急参集チームというのは全体の危機管理を見るので、原子力災害対策本部と緊急災害対策本部の間というか、常にセンターの中でこのチームは動いているというのが実態です。こういう構図で実際のオペレーションは動いたというふうにご理解いただければと思います。

情報が入ってこないという認識はいつごろからかという、現実には小部屋の中で話を聞いていると、武黒さんの話と班目さんの話と寺坂院長の話が、何を言っているのかよくわからない。僕は政治家ですから、少なくとも人命に対してはいち早く対応しなければいけないということは常に頭にあります。二言目には僕は、爆発しないのかということを知りたい。チェルノブイリやスリーマイルのような不測の事態はあり得るのかと聞くのですが、なかなかはっきりとした答えがない。

現実には東電内は停電だ、作業がしにくいという話ばかりです。もし冷却がとまれば水が減って、当時でいうと炉心溶融みたいな状況が起こりますという説明は受けるんですが、その後どうなのかというようなことについては、いや、まだ今の状況では水は残っているんですとか、いや、まだそこは確認できませんとか、非常に不確実な答えしか返ってきません。保安院に聞いてもそうです。

その当時は、そんなに情報の経路があいまいだったということを僕はわかりません。なぜなら、保安院というのは規制機関だから、しっかりと東電側をグリップしているんだと正直、我々は思っていました。ましてや原子力安全委員会の班目委員長は、一応、仮にも国会同意人事の原子力安全委員会委員長で東大の教授ですから、当時の僕ら素人から見れば、この人しか頼る人はいないわけです。保安院のメンバーも規制官庁としてあるからには、この人たちが事故のための準備をしているんだろうと思っていますから。

その組織がどうだったとか、班目委員長がどういう方だとかいうのは、皆さんの中では今は所与のものになっていますが、当時、ぼくらはそこしか頼るところがない。ですから、いろいろ聞いてもはっきりしないという状況で、総理が言っている情報が入ってこないと

いう認識よりか、情報が不確実過ぎる。僕の感じでは何が正しい情報で、どの情報が信頼できるのかわからないというのが実態でした。もうひとつ、途中で夜中に気がついたことがあります。武黒さんに物を言ったら、そのまま福島第1原発の所長に我々の意向が通じて、答えが返ってくるんだと思っていました。ところが、あまりにも武黒さんに言っても直接の答えが返ってこないで、「もういい、所長に直接話を聞くから電話をさせろ」と総理が言ったときに、武黒さんがこそっと隠れながら、福島第1原発の所長の携帯番号とか緊急の電話番号を秘書に調べろと指示を出したのを僕は見て、この人は福島と直接つながっていたんじゃないんだ、この人は全部東電本部を経由して、福島原発内の物事やこちらの意向を伝えていたんだということに気がつきました。

これにはぼくはちょっと愕然としました。つまり現実問題として、東電本部で官邸の意向を取捨選択したり、握りつぶしたり、その意向を福島に伝えないこともあり得るんだと。もしくは、福島も東電本部で1回スクリーニングされて、こっちに上がってくるんだということに途中で気がつきました。これはちょっとぼくはショックで、「あなたは直接福島とやっていたわけではないんですね」と武黒さんに申し上げた記憶があります。

途中で電話番号を確認して、直接、福島の所長とやろうとしたんですが、向こうは緊急事態です。我々の危機管理センターも緊急事態ですが、現場は多分想像を絶する緊急事態だったと思います。ですから、こっちが所長と連絡をとって直接やりたと言っても、なかなか電話の連絡がつかない。そういう状況の中でどうしたらいいんだと、その状況と一緒に見ている班目さんや保安院の寺坂さんに聞いても、右往左往して明確な答えが来ない。

ただし、電源がつながりさえすれば冷却機能は復活します、冷却機能さえ復活すれば何とか燃料損傷は回避できますと。それまでに何とか早くして、圧力が上がって爆発しないように対応するのが第一なのでと言って、夜中の午前1時半にベントの必要性について説得を受けます。そして我々はベントやむなしという判断を夜中の午前1時半にします。これは総理が了解をしました。

これも正直申し上げると、ベントとは何ぞやから始まります。何でベントしなければいけないのか、ベントしたら放射性物質は一体どのぐらい出るのかと聞いても、実ほどの程度炉心が損傷しているかわかりませんので、はっきりとした答えが出ません。ただ、私の雑ばくな記憶によれば、「チェルノブイリでも25キログラムまでしか立入禁止がありませんから、そんなに広く飛ぶわけではありません」みたいなことを班目さんが一生懸命説明していたのは記憶にあります。

午前1時半にベントを決断してから、実は午前3時までにはベントの準備にかかっていたというのが現状です。当然その間に我々は、電源車を早く着かせるようにオペレーションをしていた。その間、夜中の12時15分に総理とオバマ大統領の最初の電話会談があります。このときにオバマ大統領は、もう既にアメリカとしては最大限の協力の用意があるということを総理に伝えています。

実はこのオバマ大統領と総理の会談の前に、私は道路が寸断されて電源車が福島に着か

ないこともあり得るかもしれないと考えて、在日米軍に電源車を運べるへりはないかと問い合わせをしています。電源車の重さとか大きさからいって、結果としてそれだけの重量を運べるへりはなかったんですが、現実問題としては3月11日の夜中の12時前ぐらいには、そのことを在日米軍に問い合わせをして協力要請をしているというのが実態です。一応、現状はそんな感じでのやりとりでした。

司会 わかりました。さっき午前1時半ぐらいにベントをするようにという説得を受けたとおっしゃいましたが、これはだれから説得を受けたんですか。

福山 これは、結果としては班目さんです。

司会 班目さんからね。わかりました。

福山 はい。もちろんそこには寺坂さんも座っていますし、武黒さんも座っていますから、みんなと一緒にあれなんですけど。もちろんそこには経産大臣もいらっしゃいますが、経産大臣もこちらを説得するというよりかは、聞きながら一緒にやらなきゃしょうがないなと判断する立場でした、当時は。

司会 わかりました。

出席者1 これは放射性物質が25キロという話がありましたけども、住民避難の必要性については、だれがどういう立場で必要性が不要とか、努力してやるとか、そういう判断はするのでしょうか。

福山 原子力災害対策本部が今申し上げたように19時でした。それで1回目の避難指示が21時23分です。これは半径3キロ圏内です。これは近いので、班目委員長も含めてある程度了解を得た上で、現実問題としてはとにかくリスクが高いので早く避難をしてもらおうと。つまり、僕らはさっき申し上げたように爆発の危険性はないのかばかり聞くわけです。それはやはり人命があるからです。我々はすぐに避難をさせたいという思いに駆られるんですが、どちらかというともみんなは、いや、大丈夫です、そんなに大きくする必要はありませんと止めるんです。で、結果としては21時23分に3キロ圏内の避難指示、3キロから10キロ圏内は屋内退避の指示を出します。これはもうこの時点でも電源が復旧していませんから、電源が復旧しないということがこの時点の中ではあったので、我々としてはどんな状況で放射性物質が出るかわからない状況で判断をした。そのときはもうほとんど総理と枝野さんと私と、もちろん大臣との間で話をしました。だから、上がってくるというよりか、その場でガーッとしゃべっている感じです。

だって、そこに班目委員長も保安院の院長もいるわけですから。簡単に言えば、当時の原子力行政のトップがいるわけです。後になってから不思議なんですけど、資源エネルギー庁の長官とか、松永事務次官はこの前後は一切来ません。後になってからおかしいなと思うんですけど、当時はもう火事場ですから。そういう感じです。だから、だれがという話になると、その場で合議して決めました。最終決定者はもちろん総理です。

出席者1 具体的にベントになると明確に放射性物質が出ると思うんですけども、そこで午前3時を過ぎたから早くやれという話になって、午前6時に命令が出まして、午前7時

ごろに菅さんが着いてしまって、午前8時ごろにようやくできるという感じで所長が指示を出した。ところが、現場にまだ少し人がいるということで調整をして、現場と県は住民避難の完了を待ってベントをするということになったようですけども、官邸の立場、行政か東電の立場として、そこまで細かいことを気にしていたのか、それとも早くなのか、安全退避なのか。

福山 そこは大変本質的な質問だと思います。我々は先ほど申し上げたように、午前1時半にベントを決めました。準備をすると言われて、午前3時前に東電側からベントをやりますという話が来ました。ご案内だと思いますが、午前3時6分に経産省で海江田大臣と東京電力側がベントの会見をします。午前3時6分に会見をした後、午前3時12分に枝野官房長官が官邸でベントの会見をします。これは夜中です。

このときに、なぜ官房長官が会見をしたかというのを僕は明確に覚えていまして、東電と海江田大臣が経産省で会見をするんだから、いいじゃないかという議論が一応ありました。しかし、そこは官邸が次の日の明けてから、実は3時間とか4時間前にベントしましたという会見をしたら、間違いなく隠ぺいをしたと言われると。当時、枝野さんと私が議論したのは、とにかく早く避難はする。早く発表はする。避難についてはやり過ぎたと言われてもいいから、とにかく大きめにやる。このことは総理等も含めて確認をしました。

で、現実問題として、午前3時12分に官房長官に会見をしていただくときには、ぼくの中で会見をしてくださいと官房長官に言いながら、でもこういうことも起こります、と両方言ったことを覚えています。それは、夜中の3時12分に官房長官が会見をしたら、よっぽどの一大事だと。意志として放射性物質を外に放出するなんていうのは、日本も世界をも含めて初めてだと。どのぐらいの量が出るかもわからない。どのぐらい燃料が損傷しているかもわからない。ただ、リスクを回避するためにベントをするんだといったときに、逆に福島や日本じゅうにパニックが起こらないかという議論をしました。それでも枝野さんはやっぱり会見をして、正直に言うほうが優先だということで、実は東電で海江田さんがやっていた直後に打ち合わせをして、海江田さんにも言って、官房長官は午前3時12分に会見をすることになります。

問題は、海江田大臣の記者会見の記録を見ていただければわかりますが、「何時ぐらいからベントが始まるんですか」と記者が聞いているんです。海江田さんは「もう東電がやると言っていますからすぐ始まると思います」と答えているんです。ぼくもその前提でした。現実の問題として申し上げますと、その会見が終わった後、さあ、ベントが始まるんだということで、官房長官には執務室に1回戻っていただきました。実態として申し上げますと、そこでもベントは進まなかったわけです。

ここから先、若干話が飛んで恐縮ですが、よく言われている話でいうと、私があちこちで申し上げているんですが、午前3時50何分(59分)ごろに長野で震度6強の大きな地震があります。わかりやすく申し上げますと、冒頭申し上げたオペレーションがもう一回始まるんです。つまり、長野県で夜中に6強で起こりましたから、僕ら緊急参集チームはも

ちろんだれも休んでいませんし、一睡もしてないんですけど、もう一度あの状況が起こります。私はその原子力の小部屋から危機管理センターへ戻って、同じことをもう一回やります。そのときに、僕は『朝日新聞』にインタビューを受けたときに申し上げたんですが、私が最初に自分の記憶として残っているとなった場面はこれです。何をどなったかという、気象庁に向かって「これは誘発地震なのか、それとも余震の一種なのか、どっちなんだ」と聞きました。気象庁はもちろん「わかりません。調査中です」と答えました。

だけど、これがもし誘発地震で、東北の地震以外に長野だ、関東だ、東海だと地震が起こったら、どういう対応をするんだというのが私の中にはあって、新聞では対応能力が完全に不足すると申し上げましたが、当時、私が自分の頭の中に浮かんだ単語は全然部隊が足りない。つまり当時、福島は通信も途絶えています。それから停電もしています。自衛隊のヘリが上空から見ても真っ暗ですから、被災の状況もわかりません。津波もひどい状況は報告を受けていますが、それが実態としてどの程度の被害なのか、真っ暗ですからわかりません。その状況で夜中に長野ででかいのが起こったときに、原発の事故も抱えたまま完全に部隊が不足すると思いました。

私は本当に「日本沈没」をイメージして、どうしようと思いました。おかげさまでその長野の地震は大した被害も広がらない状況でおさまったので正直ほっとして、午前4時半ぐらいに、その地震が終わってから小部屋に行きました。地震のオペレーションを20~30分やって、落ちついてからそこに飛び込みました。小部屋へ行って、ベント終わりましたかと言ったら、まだ終わってなかったんです。

ここで私の2度目のどなりです。「午前3時に官房長官がベントをすると国民に発表しているのに、1時間も2時間もたっても終わってないというのは、どういうことですか」「何でできないんですか」「やると言ったから会見したんでしょ」と東電と班目さんに向かって言いました。総理も執務室から午前5時ぐらいに戻ってきて、何でできないんだと。そのときの答えは、停電しているので電動のベントが動きませんと。手動でやるか電動でやるかの作業をいま準備しています、というのが答えでした。

じゃ、何で午前3時にベントをやると言ったんだという疑問と、もう1点は午前1時半にベントを決めて、午前4時とか4時半とか5時の時点でベントが進んでないということは、それだけ爆発のリスクが高まっているんじゃないかと素人ながらもどきどきしました。これは皆さん、どきどきでは済まないです。一つは爆発の危険性、もう一つは作業をしている人は大丈夫なのかというのがあります。それで、どうするという話をしたときに、我々からいうと爆発の蓋然性が徐々に高まっていると思うわけです。後になって3カ月後にわかるのは、その時点でメルトダウンしていたということです。だから、ぼくらは一体何だったんだと、2カ月後か3カ月後に多少無力感にぐっとなりましたけど。

でも、現実問題として午前5時半ぐらいにベントされないと、いつできるかと。「いつできるんだ」と言っても、「わからない」「今作業しています」と言われている時点で、要は爆発のリスクがあったら困るから避難を広げましょうと、午前5時44分に10[＊]圏内の避

難の指示を総理に決めてもらって、そして午前6時過ぎに総理が視察へ出るときに、ぶら下がり避難の指示をしまして10^分以内の避難を決めます。これが実態です。

本来は保安院がオフサイトセンターを中心に、市町村をグリップしてやらなければいけないというのはわかるんですが、そんな細かい防災マニュアルを当時政務は知りません。保安院が現場とグリップして市町村と連絡をしてやっているというのは、我々からいけば所与のものだという感じです。だって、保安院は規制官庁で、そのことの準備を防災計画も含めて地方公共団体でやっているということだけはわかりますから。だから、そのときに例えばベントが遅れたのが、総理が行ったからだとか、途中で市町村と調整していたなんていう報告は、一切官邸には上がりません。

ごめんなさい。もう1つだけ言います。官邸という表現は非常に危なくて、さっき申し上げたように官邸には危機管理の職員が200人ぐらいいます。そのそれぞれの役所のブースに紙がぺろっと上がってきているのは、我々政務に上がってくる話とは違いますから。つまり、官邸に上がっている議論というのはすごい危ない議論で、政治の意思決定のために上がってくる情報は我々としては受けとめられますが、事務方だけで握っている話は、官邸に報告しましたといっても、それは省庁内の縦の連絡だけですから。

それは官邸に上がってきたというのではなくて、省庁内で経産省なら経産省の現場から、経産省に上がったというだけの話であって、官邸の場所にはいるかもしれませんが、実際の官邸の政務に上がってくることは別の次元です。この話も報道でよく混同して議論されてきました。だから、今のご質問でいうと、ベントがおくれたということは、何らかの理由があるという報告は全然上がってきていません。我々に上がってきているのは単に電動のベントが動かないから電源を待っていると。途中からは冷却機能の復活のための電源なのか、ベントをするための電源なのか、我々に来る報告でいえばもう一緒くたになっています。だって、現場の状況はさっき言ったように、全部東電を通じていたわけですから。これが実態です。

ばくら官邸の中にいる政務の意識としては、ベントが遅れたのは総理が現場に行ったからだなんていう意識は全くありません。だって、午前3時からとにかくやると東電が言うから、やれと言っているわけですから。ここが非常に大きな認識の違いだったと思います。

市町村との関係でもう1つだけ言わせていただくと、ご案内のように防災マニュアル、根拠マニュアルがあります。これによると現地のオフサイトセンターに市町村を集めてみたい話がありますが、それはもうできない状況です。なぜなら通信手段が途絶えているし、それぞれの市町村が津波と地震で被害に遭って、職員も被災しています。さらに申し上げれば連絡の手段がありません。それからオフサイトセンターは、福島の場合では5^分以内のところにありますので、近場です。そこに人を集めるというようなリスクは、その状況では考えられません。

防災マニュアルによれば、当然放医研から人を呼ぶとか、市町村の担当者が集まるとか、こっちからも行くみたいな話がありますが、爆発するかもしれないといってリスクを抱え

ているところへ、道路もどこが動いているかわからない、通信が途絶えて停電しているような場所に人が集まって協議するなんていう話は、全くぼくらは当時リアリティーがあると思っていないので、逆にそういう発想は全然ありませんでした。

ただ、現地がどうやって住民に避難の連絡をするんだと。この問題意識はありました。だって、通信も途絶えて停電もしているわけですから。そこには緊急の防災車が地域を回って、マイクで避難の指示を出しますという報告は、保安院から受けていました。これがその当時の現状です。

司会 ありがとうございます。大分答えていただいたところが多いですが、あえて少し関連質問ですけれども、「避難指示等の決定過程において、その発表前にどの程度、広域自治体である福島県や、基礎自治体との連絡調整がなされているという認識を持たれていましたか」。特に県ですね。

福山 ここは基本的には保安院が都道府県とやってもらっているという認識なので、我々は官邸の中ではとにかく意思決定をして、後のオペレーションはそれぞれの部署でやれという意識でした。

司会 保安院は、実際はどの程度やっていたんですか。

福山 ここはよくわかりません。ただ、福島は当時オフサイトセンターに副知事も入っていましたし、保安院のメンバーもいましたので。ここは推測ですけど、官邸が意思決定をしたから、そのようにやろうという感じで、調整というような余裕はなかったと思いますね。だって、そのときにはもう早く防災車を回して避難をしてもらうというようなことが多分大変だったと思いますので。明け方の5時44分は、現場で僕らが聞くと、ラジオを聞いて避難をしたとか口コミで避難をしたという住民の方が多かったと思います。とにかく皆さんは場所がわからなくて、例えば双葉町とか大熊町の方は川俣町の町長と懇意だからということで、30^{キロ}も超えれば大丈夫だろうということで、受け入れてくれと川俣町の古川町長に双葉町の井戸川町長が電話をして、みんながワッと行って、川俣町はその日の午前中に約6000人受け入れたと聞いています。

結果として、それは線量が高い地域への避難ということになるんですけど、14、15日の線量からいうと。ただ、当時、川俣町は自分らは安全だという前提の中で、停電の中でどんどん来る避難者の車を消防団が手旗信号で対応して、町の人がそれぞれの持っているお米を集めて炊いておにぎりをつくって、体育館とかに双葉や大熊の人たちを避難させて、第一避難の対応をしていただいたと、僕は現場の川俣の町長や川俣の人から聞きました。

司会 「3月11日の20時50分に、福島県知事より半径2^{キロ}圏内の住民に対する避難指示が出されました。これは21時23分に出された菅首相による3^{キロ}圏内の避難指示と対象範囲が異なりますが、国・県の間での連絡調整は存在していたのでしょうか。また、政府の発表以前に、県が異なる発表をしたことによる影響はありましたか」。

福山 ここは申しわけありませんが、福島から2^{キロ}圏内の住民に対する避難指示を出したということの事実関係の把握は、当時僕らが出す段階ではしてないと思います。このご質

問を昨日いただいて拝見をして、僕の中の認識はありませんでした。ひょっとしたら、現場の保安院とか現場の福島県はあったかと思いますが。ただ、今日確認しようと思って福島の副知事に電話して、「出していましたか」と言ったら、「へえー、確認します」と言っていましたから、福島県副知事からまた確認の電話がかかってくると思います。そのときにはちゃんとご報告しますから。

司会 よろしくをお願いします。

福山 当時は私、福島が先に2^キを出したという意識はありませんでした。

司会 次の質問です。「住民避難の判断についてですけれども、8^キ圏から20^キ圏への避難拡大はどなたが、どういう助言に基づいて判断されたのか。また、20^キから30^キ圏内の屋内退避という措置は、どういう判断に基づいて出されたのか。難しかった点はどこだったでしょうか」。

福山 8^キから20^キという区切りをどこであれなのかを、よく確認しなければと思っ
ていますが、ご質問された方でもし何か補足があれば後で言っていただければと思っ
ていますが、ご案内のように12日の午後5時39分、例の水素爆発の後ですが、そのときに10^キ圏内の
避難を第2原発で出しています。これはより広くしたということです。

第1原発はご案内のように午前5時44分に10^キを出しています。12日の17時39分が
第2原発の10^キ圏内。それから12日の午後6時25分が半径20^キ圏内の避難です。ここ
はもう確実に何で判断したかという水素爆発です。水素爆発はよくわかりませんでした。
よくわかりませんでしたと言うと困るんですけど、皆さんがよくご案内のように12日の午
後3時36分に水素爆発が起こったんですが、17時45分の官房長官会見まで、保安院から
も東電からも水素爆発の詳細についての報告はありませんでした。

一報はあくまでも白煙が上がっているという話でした。午後3時36分に、白煙が上がっ
ているという報道がまずされます。それで、これもはっきり僕は覚えているんですが、総
理の執務室で班目さんに「何なんですか」と言ったら、班目さんは「揮発性のものなどが
あちこちにあるので、それが燃えているんじゃないか」というような話をされていました。

「一体これは何なんだ」と言っている最中に、寺田先生が飛び込んでこられて、日本テレ
ビが映像を映していると言って総理の執務室のテレビを見ました。そうしたら白煙が上が
っているどころか、建屋がボンと飛んで煙がすごい上がっています。あれを映像で見た
瞬間に、私と総理は「あれが白煙が上がっているのか、爆発じゃないか」と言いました。
だって、白煙が上がっているというイメージとあの爆発は到底結びつきませんよね。

それで、現場はあの爆発がわかってないのか、現場はわかっているはずだろうと。私は
素人なので、班目さんに「あれはスリーマイルとかチェルノブイリの爆発じゃないんです
か」と聞いたら、明確に答えられないんですね。総理もそれがチェルノブイリ型の爆発だ
ったら困るという思いがあったんです。「あれは一体何なんだ、報告しろ」と保安院、東電
に言っても、明示的な報告がないまま、午後5時45分から官房長官の会見が予定されてい
ました。官房長官が総理の執務室に来て、事前に打ち合わせをしているときに、まだはっ

きり何の爆発かわかりません。今だから水素爆発で建屋だけが飛んだというのがわかるんですが、あのときは格納容器や圧力容器も一緒に吹っ飛んでいるかもわからないわけですから、どうすると。その報告が来ない限りは会見できませんねと言って、官房長官に会見を延期しますかと相談をしたら、枝野さんが、これでなおかつ延期したら国民に動揺が広がると。だって、午後3時36分で、2時間たってもはっきりわかりませんなんて。それで延期しますなんて言えないと。ぼく会見に行きますよと言われた。ぼくはそれまでも官房長官の会見にずっと陪席しておつき合いしているんですけど、非常に送り出すのが嫌な会見でした。そのときに枝野さんの口から出た言葉が爆発的事象なんですよ。

出席者2 それは枝野さんのアドリブですか。

福山 そうです。これはすごいなとぼくは思いましたけど、爆発的事象が起こっていますと。ただ、唯一そのときに若干上がっていた報告では、建屋の爆発の後、東電の福島原発サイトの入口の正門の線量はあまり上がっていないんです。だから、チェルノブイリ型の格納容器や圧力容器の爆発ではないんじゃないかという推測はありましたが、わからないんです。早く報告しろと言っても全然報告が上がってこなくて、結果としてこの前後に例の注水の話が出るんです。

司会 水はちょっと後でまた伺います。

福山 これが実態としての水素爆発の前後です。

司会 最初の質問に帰りますけど、20^キというのを1号機に関しては12日の午後6時過ぎに決めるわけですけど、なぜ50^キではなかったのか。さっき官邸政務の中では、住民の健康を考えたときに広めにとろうじゃないかという考え方で一致していたとおっしゃったので、それだったら20^キでなくて最初から50^キでもよかったかもしれないし、どういう議論がそもそもあったのか。なぜ20^キとしたのか。しかも、なぜ同心円ということだけにしたのか。その辺の議論はどうなっていますか。

福山 これはさっき申し上げたように爆発して、午後5時45分から官房長官が会見をして、その後、午後6時半に20^キ圏内の避難にするんですが、これはまず一つは、まだこのころは水素爆発かどうかわからないので、どういう形で放射性物質がさらに飛散するかということが想定できないんです。この時点では、すみません、SPEEDIの存在はだれも知りません。班目さんは知っていたかもしれませんが、我々は何も知りません。さらに申し上げれば、チェルノブイリも同心円で避難をさせていたというプレゼンテーションしか事前にはありませんでしたので、とにかく同心円で移動させると。

それから、大きめにとると言いながら、なぜ50^キではないのかというのは、これは簡単で、後の15日の20^キから30^キの屋内退避と同じ理由になります。同心円が広がれば広がるほど、お手元にお配りしたこの絵をちょっと見ていただくと、赤ラインが20^キですが、20^キでも南相馬1万4800、大熊1万1500、川内1100、浪江1万9600。もちろんこれはこの中的人数ですが、同心円が広がれば広がるほど避難の人数が広がります。

避難をさせるときに重要なのはマッチングです。実は、保安院は10^キ圏内までの避難は、

もともと防災計画にあったので一応の準備はありましたが、20[㌔]という準備は全くしていません。そうすると避難のどこでマッチングをして、どこへ行ってもらおうかということすら想定がまだありませんでした。

それと、問題は避難をするときに妊婦、子供、お年寄り、特に病気のお年寄りから避難をしてもらってくれということになると、これは自衛官とか警察とか消防隊がみんな出ていきますが、そのときに同心円が大きくなればなるほど避難の対象人数が大きくなります。そうすると、例えば20[㌔]圏内でも、避難をするのに何日かかるかと危機管理監に聞くと、大体3～5日という状況になります。そうすると、3～5日間外へ出るオペレーションをするわけです、警察、自衛官、消防隊、それから避難している住民も含めて。僕らはそのときには、まだ爆発のリスクをずっと心配をしています。つまり、外へ出て3～5日かかっている間に何かが起こったときには、移動中に外部被曝のリスクが起きてきます。だから、50[㌔]とか80[㌔]というのは、避難の距離としては非現実的なんです。もっと言えば、これは特に15日の決定にかかわるんですが、避難距離が福島市とか二本松市に入った瞬間に人口が爆発的にふえます。そうすると、避難場所もオペレーションも含めて、とにかく近い人から優先的に逃げさせないと。皆さんもおわかりのように、遠い人が動き出して近い人が動き出すと、こっちも出だすと絶対に道路は渋滞します。遠い人は早く逃げられますが、中の人はずっとそこに缶詰になる可能性があります、渋滞も含めて考えると。

ところが、リスクは近いほうにあるわけですから、まず近いほうを出す。それを最小の日数で。さらに作業をしていただく公的なオペレーションをする人たちのリスクも含めて考えると、実は大きめに小出しにしかできない。いきなり幅多くどんというのは、避難のオペレーションとしては現実的ではなかったというのが実態の理由です。

司会 ありがとうございます。関連質問ですけども、20[㌔]から30[㌔]圏内の屋内退避とありますが、この自主避難という概念と言葉は、いつ、どこで、だれから出てきたのでしょうか。

福山 自主避難の概念は、枝野さん、寺田さん、私、総理、海江田大臣、細野さんもいたか、それからスタッフ——保安院とか安全委員会のメンバーも含めて——が総理の執務室でよく避難の議論をしたときに、我々は官僚の意見も聞きながらやっていましたが、いま言われた14日の20[㌔]から30[㌔]圏内の自主避難と屋内退避は、まさに今申し上げた理由と同じです。これを見ていただきますと、20[㌔]から30[㌔]になると一気に人口がふえます。このときのこの人口を避難させるのにどのぐらい時間がかかるかといったら、5日から1週間と言われました。15日ですから、当時はサプレッションチェンバーが爆発して、一番放射性物質が表へ飛散したときで、撤退で大騒ぎになったときです。あのときですので、僕らはまだ爆発のリスクがあると思っていました。

ですから、その分も含めて考えると、20[㌔]から30[㌔]の人を外へ出すよりは、屋内退避をしてくれと。自主避難は、なぜそういう言葉を使ったかということ、車を持って自分が移動できて、ちょっと離れたところに避難場所を自分たちで確保できる人たちに関しては自

主避難をしてくださいという概念です、僕らの中では。つまり、自力で避難できる人には自主避難をしてくださいと。しかし、自力で避難もできない、避難場所も見つけれない、移動に手段が要る人は時間がかかります。極端な話、僕らがバスをしつらえたとしても、おれが先、おれが先みたいな話で、どのバスに最初に乗るかでパニックが起こります。そのことを考えたときに、20^{キロ}から30^{キロ}は距離としてはかなり大きな距離なので、放射性物質がたとえ飛散したとしても、屋内にいる分には被曝のリスクは少ないということを考えて上で、我々は自主避難と屋内退避を20^{キロ}から30^{キロ}に決めました。結果としては、この自主避難と屋内退避が一月ぐらい続いたと思います。

司会 4月22日でしょう。

福山 これは僕らにとっては大変な反省材料です。我々にとってみれば、屋内退避は3日か4日で終わるつもりでした。なぜかというと、外部電源を引っ張る工事を東電がしていて、電源さえちゃんとつけば冷却装置は戻ると。その当時、僕らはまだ信じていましたから。そうすると、原発がある程度おさまる状況になる期間だけ家の中に閉じこもっててくださいと。被曝の危険がないようにというのが我々のイメージでした。

司会 わかりました。14日とおっしゃいましたけども、15日ですよ、20^{キロ}は。

福山 20^{キロ}、30^{キロ}圏内は15日の午前11時じゃないですか。

司会 その次の質問に移ります。先ほど12日のときに、水素爆発の後、10^{キロ}にしたときに、SPEEDIのことは知らなかったとおっしゃいましたけども、これに関する質問です。「SPEEDIについて、所管官庁からいつ、どういう形で官邸に報告が上がったのか。また、なぜそのデータを早期の住民避難に生かすことができなかったのか」。

福山 正式なSPEEDIの結果としてまともに上がったのは、ご案内のように23日です。これは正式に表に発表した日です。ただ、私の記憶では、14、15日からマスメディアを通じてSPEEDIがあるはずじゃないかという議論があったときに、僕は班目委員長を自分の部屋に呼んで、「SPEEDIを何で回さないんだ。回しているんだったら資料をくれ」と言ったら、班目さんは「SPEEDIは回していない」と明確に私にはお答えになっていました。

当時でもそうお答えになっていました。だから、SPEEDIの存在を自覚したのは14、15日です。結果として、それでも回してないという報告を班目委員長から受けていたので、原子力安全委員会の委員長が回してないと言われたら、それは信用するしかないですね。

結果としては、11日の夜中の午前1時半に我々がベントの意思決定をする手前にSPEEDIを回して、1枚ぺらっと官邸の保安院のところに入っていたというのが後になってわかるんですが、これはあくまでもご案内のように原単位のSPEEDIを回すことになっていて、要は1単位か何かで回していて、当時は風向きが海側に行っているんで、全く内陸部に放射性物質は出ないというSPEEDIの結果になっていたそうですが、我々には全くそのことは知らされていません。一方でこのSPEEDIの結果を、我々が本当にSPEEDIを知っていて、保安院も文科省も原子力安全委員会もこのことを事前に我々に報告していて、これが活用できたかどうかというと、実は私は懐疑的です。それはなぜかということ、当時は放射性物質

がどの程度飛散しているかとか、燃料棒がどの程度損傷しているかというのは、電源が切れている状況で全くわかりません。

SPEEDI というのは、ご案内のようにこの程度の放射性物質が損傷しているものの数字を入力して、当時の風向きとかで合わせてシミュレーションする予測ソフトです。1単位というよくわからない、ただの仮の単位を入れたものの SPEEDI の予測で、本当に10^キ、20^キのレベルの住民の避難指示が場所を特定してやれたかということ、多分やれません。申しわけないですが、予測ソフトにそこまでの正当性は政治的には与えられません。私は SPEEDI が活用できたかどうかというのは大変懐疑的です。

実態としても、SPEEDI は方向性としてはある程度正しい方向を出しますが、現実の放射性物質の飛散量みたいなものは結構ばらつきがあります。だから、私は知っていたとしても、当初の避難は恐らく同心円状で行われていたと思っていますが、ただ、このことの存在とか報告がなかったことに関しては、大変な反省材料だと思っています。

出席者 3 その点で1点お聞きしたいんですが、SPEEDI は確かにそのとおりだと思いますが、東電から保安院に上がっている15条通報の通報資料の中に、ERSS だと思いますが、それを使ったベント作業等の被曝線量評価がありまして、12日の午前3時33分に2号機のベントを行った場合の被曝線量評価で、大熊町熊地区で28^ミシーベルトですか、午前4時03分には1号機のベント評価が行われまして、これもやはりその辺の地域、南西方向に4キロぐらいの地点で、20^ミシーベルトぐらいの被曝を住民の方がされる可能性があるという情報が来ているんですが、これは……。

福山 12日ですか。

出席者 3 12日未明です。

福山 明け方ですか。

出席者 3 明け方です。12日の午前3時33分と午前4時3分に2号機、1号機の被曝線量評価が福島第1のサイトから保安院に上がっているという通報資料が出ているんですが。

福山 逆にそのこともあったので、午前5時44分の避難につながったのかもしれない。

出席者 3 ただ、それでいきますと、それを受けまして、東電が大熊町の町役場に職員を派遣されて、避難の状況を確認されるという作業を午前6時過ぎからやられていますので、結果的に避難を待ってからのベントというような判断を東電のサイトのほうがするのと、ちょっとかみ合わせが……。防災とシビア・アクシデント・マネジメントの関係性からどうだったのかなと、もう一つ重要な検証ポイントだと思っているので。

福山 そこはずれているのかもしれない。そこは逆に言うと、官邸レベルには上がってきていません。つまり、そこはあくまでも東電と市町村と保安院の中の、特に地域の中で調整をしていた可能性は高いです。

出席者 3 逆に言いますと、官邸としてはサイト内のアクションを助けるというような発想に基づいて、恐らくそれは不可能だと思うんですが、避難指示等を検討されていたというような事実はないと言い切ってしまうてよろしいでしょうか。

福山 サイト内の？

出席者3 サイト内。つまり、発電所の中でいろんな活動、例えばベントの作業とかをやられるときにそれを助けるような仕方、例えば南向きに風が吹いているので、南側の避難は一時待とうみたいな判断は全く……。

福山 そういう判断は全くないですし、そういう判断をすることが必要だという要因へのサジェスション等は保安院からも全くありませんでした。

出席者3 そうですか。あわせてもう一つお聞きしたいのは、ベントをしたときにどれぐらいの時間、放射線が出るというような認識でいらっしやったのか。

福山 それは班目委員長に聞いても、まず量がわからないのでわからないとか、そういう話ばかりでした。だから現実の問題として言うと、大熊とのオペレーションなどということが例えばあったとしたら、海江田大臣が午前6時50分に強制的にベントの指示を出しますよね。ああいう発想はなかったはず。つまり、総理が出発された後も、我々はベントを早くしないと危ないという班目さんや寺坂さんを初めとした人たちの話を受けて、とにかく早く指示を出せと。それが東電の意思でできないんだったら政治の意思で命令をしたほうが、やるんだったらいいという判断でやっていましたので、今おっしやったような情報も判断もなかったと思います。

司会 次の質問です。SPEEDI ですけれども、「16日にSPEEDIの運営の主管、所掌について、文科省から原子力安全委員会に移転が官邸から指示されているようだけれども、これはどういう理由によって決定されたんでしょうか」。

福山 これは正直申し上げますと、11日からのずっと継続案件なんです。モニタリングはサイト内は東電がやっています。周辺は経産省がやっていますが、電源が切れているので全然わかりませんみたいな話です。文科省がモニタリングと言いながら、そこはぼつぼつとやっていてあまり要領を得ません。福島県は福島県でモニタリングをしていて、新聞か何かには福島県の評価が出ているんですけど、それもなかなかこっちには上がってこないというのが12、13、14日とずっと続きます。そうすると、一体どこが主体となって責任を持ってモニタリングをしているのかということが、ぼくらが聞いてもよくわかりません。その状況で、評価については現実問題として安全を考える上で判断をしてほしいということで原子力安全委員会、モニタリングについては一義的に責任を持ってやってほしいということで文科省と、枝野官房長官がその場で判断をしました。

司会 わかりました。

出席者4 その関連で、アメリカが航空機を使って放射性物質の汚染地図を。今はこういうふうになっていますけれども、それは早い段階で来ていたのか。

福山 いや、早い段階では来ていません。

出席者4 3月23日に、原子力安全委員会がSPEEDIを使った汚染地図を出しましたが、あれよりも後ですか。

福山 後ではないです。前です。

出席者 4 あれの前ですか。

福山 前には来ています。

出席者 4 逆に言いますと、原子力安全委員会が3月23日に出した汚染地図は、アメリカのそれを参考にしてつくったのか。

福山 いや、違います。私の記憶では、17日ぐらいから SPEEDI を具体的に回すというオペレーションは入ったんですが、ご案内のように SPEEDI は原単位とか予測の仮の数字ではなくて、本物のどのぐらいのものが出ているかというときに、逆算してできないのかと、ぼくとか枝野さんは班目さんらに言いました。つまり、モニタリングの数字を見て、この数字がこの距離で出ているんだったら、この程度本体から出ていると逆算して出ないのかと。そのぐらい出るだろうという話を班目さんらにしたら、今モニタリングしていますと。ダストモニタリングという、要はきちんとダストをとって、その量と距離を合わせて対応したら何とかなりますと言って出てきたのが、23日の最初のやつです。

要は、ダストサンプリングをやるときに、16、17日ぐらいからやっていたんですけど、私は技術的なことはわかりませんが、ただ、当時は海沿いに風が吹いていて、ダストサンプリングで有効な数字が初めてとれたのが、22日とか23日だと彼らは言っていて、結果としてそれを前提に、最初の公式発表の SPEEDI の結果が出たというのが、私が受けている報告の実際の状況です。

司会 これとの関連で二つ挙げておりまして、一応読みます。一つは「モニタリングについて、アメリカのエネルギー省が空中モニタリングで情報をとっている。これは25μ_{Bq} (40^キμ) の地点です。これはPAG (Protective Action Guide) を超えた線量を測定。このような情報は、日本政府にいつの段階でどのようにシェアされたのでしょうか」。

もう一つは「ソースデータがなかったからシミュレーションはしようがなかったし、それに値しなかったという事務方の説明を、政務サイドは受け入れたのでしょうか」。

福山 1点目のアメリカの航空機サーベイで出てきている話は、どの時点で我々のところにもたらされたかというのは、実は私なりに言うともあまりはっきりとした記憶はありません。ただし、21日から日米協議が始まります。それで3月19日に防衛省で、3回目の防衛省とアメリカとの会議が始まります。この前後には、我々のところにもアメリカはこういうふうな数字を持っていると、何となく紙っぺらで報告が来たような記憶はあります。明示的に、これがアメリカのサーベイですと正式にだれかがというよりは、何となくアメリカはこんなことを言っています、アメリカのサーベイではこうです、というような感じが来て、そしてその状況を受けて日米協議が始まったというのが、私の何となくの記憶です。ここは実は相当あいまいです。

それから二つ目は、先ほどの SPEEDI の話を受け入れたか受け入れないかという話でいうと、そのダストサンプリングをもって、SPEEDI で初めて数字が出たという話を結果として23日に聞いたときは、そのダストサンプリングのやり方でやっていたということも、あまり明確な説明はありませんでした。

後になってからはありましたけど。結果として、さっき言ったように14、15日に、ぼくが班目さんに「何でSPEEDIを回してくれないんですか、回してください」と言ったときに、「回していません、回していません」と言っていたのは、彼自身としては、ちゃんとした放射性物質量がわからないからという理由なのか、原子力安全委員会と文科省の間でのコミュニケーションが悪かったからなのか、そこは正直言ってわかりません。

司会 あるいはソースデータがなかったから、ないままに回したとしても、それは本当に回した意味にならないということですか。

福山 そういう判断を班目さんがしていた可能性はあります。

司会 そうすると、SPEEDIはリバースといいますか、ダストのモニタリングのそういうことをやったにしても、それは避難には1回も使ったことがなかったということですね。

福山 いえ、結局23日以降の避難では使うんです。23日じゃない。

出席者3 計画的避難区域に使う。

福山 そう。計画的避難区域には有効に使うんです。

司会 ああ、そうか。4月22日の。

福山 いや、計画的避難区域を決めるに当たっては、有効かどうかは別にして、SPEEDIの結果を活用します。

司会 なるほど。

出席者3 そこなんですけど、少し揚げ足をとる質問ですが、SPEEDIの結果に基づいて計画的避難区域を設定されたのか、それともモニタリングの結果に基づいて計画的避難区域を設定されたのか、どちらかと聞かれたらどちらになるんですか。

福山 モニタリングだと思います。

出席者3 モニタリングが主で、SPEEDIが従という扱いでよろしいんですか。

福山 はい。片方だとは言いません。両方は間違いないですが、モニタリングだと思います。ただし、今申し上げたように、当時はSPEEDIの結果は十分活用できるという前提の中で回しました。

司会 次の質問に移ります。食品汚染への対応についてです。「水道水の放射能汚染が明らかになり、ミネラルウォーターが品切れになるなど、食品汚染に対するパニックに近い状況が起きました。政府のリスクコミュニケーションについての問題点はどこにあったとお考えでしょうか」。

福山 リスクコミュニケーションとしては、非常にオーバーな表現をすれば当時、我々のツールは1個しかありません。枝野長官の会見しか、実はリスクコミュニケーションのツールがないんですね。ですから、枝野さんの会見のある種クレディビリティがどの程度かによって変わりますが、一般的に申し上げれば、初めて東京都民が放射性物質のリスクを自分の生活の中で感じたのが、あの水の話だったというふうに思います。そこはある意味、枝野さんの会見での安全だという話だけでは不安で、水を確保することについては抑え切れなかったというのが正直なところだと思います。もう1点は、東京都が貯蔵してい

た水を全部開放して、特に妊婦の皆さんに水を配布していただきました。これは官邸と東京都も相当密に連絡をとり合って、私も猪瀬副知事と直接連絡をとり合いながらやったんですけれども、これは水を配ったおかげで、逆に余計買い占めを加速させた。ただ、それは水を配らざるを得ないんです。やっぱり子供さんを抱えているお母さんがいる。

そのことが買い占めに余計に行ったというのはしようがないですが、当時、厚生労働省と枝野さんと私とで何回もやりましたが、とにかく厚生労働省は頑張っ、関西圏にある在庫を全部持ってこいみたいなオペレーションは本当に必死になってやってくれていました。それが結果として足りなかったとか、時間がかかったという議論はあると思いますが、とにかくそのときはあまり大きなパニックにならないためにやったというのが実際に、リスクコミュニケーション的にいえば、少しまずかったかなと思います。

司会 さっきおっしゃったのは、金町浄水場の問題からのあれですね。

福山 そうです。

司会 またリスクコミュニケーションの関連ですけれども、「菅政権にとって危機後の大事なコミュニケーションの機会となった3月11日、3月12日の総理会見のスピーチ原稿は、だれがどのようなプロセスで作成したのでしょうか。官僚の関与はあったのでしょうか。どのような議論があったのでしょうか」。3月11、12日の菅さんの最初の国民の前でのスピーチですね。

福山 どんな中身でしたか。

司会 ここにあります。これです。3月11日16時54分、菅総理会見。「国民の皆様」から始められている。

福山 11日の午後5時前後はほとんど役所、秘書官が書いている。秘書官プラス元TBSの下村君、プラス私と寺田さんが介入して多分書いていると思います。

出席者1 次の日もそうでしょう。

司会 12日に今度は水素爆発の後、総理が夜やりますね。午後8時32分、これですね。

福山 これも大体同じメンバーです。事前にこのころは多分、枝野さんが……。会見前にみんな集まって、この集まりには経産大臣とかは入りませんが、総理、枝野さん、私、寺田さん、細野さん、秘書官、下村さんあたりが集まって、ほぼこれでという感じになると思います。大体会見は常にそんなメンバーです。ベースを秘書官が書いて、寺田、福山、菅さんで手を加えるという感じです。

司会 これはほかの質問との関連もあるんですが、これは非常に複合連鎖危機だったわけで、地震があって津波があって、原発事故があって環境汚染があると4つあるんですけども、この4つをどうフォーカスしながら、国民にどういうメッセージを与えるか。結構その辺プロポーシヨンの問題も含めて、腐心されたのではないかと思います。

福山 総理の2回目の会見をごらんいただいてもおわかりのように、原発だけではなくて、仮設の話とかをもう既に12日の午後8時の時点で始めています。それで、これは完全にオペレーションが違う状況になっていましたので、先ほど申し上げましたように、原子力災

害対策本部と緊急災害対策本部を両方並行して対応させながら、ほとんど原子力災害対策本部と緊急災害対策本部を同時にするか、同じような形にして大臣には共有をしながらやっていくという形で、できれば岩手、宮城については、当初はとにかく自衛官の例の10万人体制も含めて、リソースを早く投入することを中心に考えました。

ここは基本的には、防災大臣を中心に対応していただいたというのが実態のところ、若干の反省を込めて言うと、官邸の特に菅、枝野、福山、寺田あたりもみんな原発事故に、サッカーでいえば、一つのボールに集中し過ぎた嫌いはあったかもしれません。

司会 これには「未曾有の国難」という言葉が最後にありますが、これも秘書官ですか。

福山 これはもともと秘書官だったんじゃないでしょうか。

司会 わかりました。次の質問です。先ほど海水の問題を飛ばしましたが、「原子力圧力容器を海水で満たすこと、という指令を3月12日に海江田経済産業大臣が出されました。他に官邸のリーダーシップで実施されたシビア・アクシデント・マネジメントがあればご教示ください」。

福山 海江田大臣が海水を入れろと言ったのは、実は水素爆発の前から水がなくなっている、海水注入やむなしという話は官邸に来ていまして、これは班目委員長を多少弁護すると、彼はずっと水しかないということは言っていました。最悪は海水でも入れざるを得ないと12日の午後からずっと主張されていた。実は水素爆発の報道があった瞬間に、水の話が1回飛んだというか、この爆発は何だという話になりましたが、結果として夕方に先ほど申し上げた爆発的事象だという枝野さんの会見をやっている最中に、海江田さんや総理や細野さん、班目委員長の話の中で水を入れる話が具体的になりました。これが海江田さんの水を入れるという指示になります。ただ、水を入れるという指示を決めた後、菅さんから水を入れたら再臨界の心配はないのかという問題提起がされて、班目さんが「ゼロではない」と答えました。これは新聞報道で私が無理やり班目さんに言わせたいになっていますが、私は班目さんに「そういう表現を使われましたよね」と言ったら、班目さんが自分で認められました。だから、ぼくは「そういうことにしておきましょう」と言ったのではなくて、「そう言われましたね」と確認したら、「そう言った可能性はあります」と彼は言って、その後の国会答弁でも彼はそのことは一切否定されませんでした。

で、再臨界の可能性が出るという話が出たので、注水には準備がかかりますと。これは先ほどの武黒さんが、対応をチェックしますと言ったのが、午後6時過ぎだったと思います。水を入れる準備が2時間ぐらいかかるのでと武黒さんが言われたので、じゃ、午後8時の時点で水を入れるかどうか正式に決めようと。それまでに再臨界の確認をしておいてくれという指示を出して、みんな散りました。

午後7時40分ぐらいに執務室に細野さんが入ってきて、実は周辺の線量が水素爆発の後、下がっていることを確認したので、これは水素爆発だということになりました。結果として、水も入るということを細野さんが確認したので、じゃ、正式に水を入れましょうと言ったのが午後8時過ぎのことになります。これが実際のところなんです。ですから、水を入れ

ろ、入れろと大騒ぎをしていたのは菅さんなので、我々からいうと、菅さんが水を止めたなんていうのはほとんど記憶にないというか、そんなことはあり得ないという話だったんですが、報道が出たので若干びっくりしたということです。

シビアアクシデント・マネジメントですが、ほかの場面はどんなことがあったかという、どの時点でどういう話というのは、実はさっきから申し上げているので皆さんお気づきのように、ずっと時系列でこの話は続いていきます。そのたびに実は判断はしています。それを海江田大臣なり保安院なりに伝えるのが東電に行っているという状況になります。例の撤退の話も、現実問題として撤退をしないで作業を続けろという判断をしているということです、具体的にこれが、これがと言われるとちょっと難しいなという感じです。

司会 その海水ですけれども、確かに水を入れろと一番言っていたのが総理だったということですけども、しかし東電は武黒氏が海水注入一時中断というようなニュアンスを現場に伝えたと言っているわけです。つまり、だれかが「総理そうおっしゃいますけど、やはり今やると」とかなり政務サイドで言ったのか。班目さんの再臨界の話は別として、何かもう少し議論があったから、それを読み間違えたか。あるいはそういうニュアンスとして受けとめて、武黒さんがF1のほうにそういう形を伝えたのか。そこはどうなんですか。だれかあったんですか。

福山 この事実関係はぼくはよくわかりませんが、正直に申し上げますと、武黒さんがやめろと言ったこと自身もぼくは懐疑的です。やめろと言って、結果として吉田所長がやめなかったということですよ。僕は非常にそこは懐疑的で、最初何と言ったか、もう1回申し上げます。これは僕の中では2説あるんです。まず、今の東電説はこうです。再臨界の可能性があったらやめろと総理が言ったから、武黒さんがいったん止めさせたと。だから、注水をやめたという話になっている。それを吉田さんは無視をしてやめなかったもので、事なきを得たというのが1つの説です。

私の仮説は実は別でして、再臨界の可能性があると総理が聞いたときに、班目さんがゼロではないと言っている。そのときに武黒さんは事前に1時間半ぐらい水を入れるのに準備がかかりますと言っている。なぜかという、注水するときその管が地震でやられているかどうかも含めて、確認しないと水は入れられませんと。その準備に1時間半かかると言っているんです。だから、我々は2時間後に、その結果をもって水を入れられるかどうかを判断しましょうという話をして散っているんです。

で、最初のクロノロジーを確認すると、試験注水となっているんです。つまり、水が本当に入るかどうか試験注水しなければどうせだめだから、その試験注水に1時間か2時間かかりますと。だから海江田大臣が入れろと言ってから、2時間ぐらいかかりますと。この2時間の間に、再臨界が起こるか起こらないかを原子力委員会のプロの目で検証しておいてくださいと言われていたんです。僕からいうと、水が入るかどうかの試験注入をして、結局入って試験注入をしたけれど、後は正式に指示が出るまで待ちましょうと試験注水を1回止めて、指示が出て入れたというんだったらぼくはよくわかるんです。

司会 なるほど。そうか。

福山 私の当日のノートには「管は生きている」というメモが入っているんです。つまり試験注水で管は生きている、水は入る、とそういう報告のメモが残っているんです。これはもういろいろ政治的な話なのであまり言いたくありませんが、途中で総理がとめたというようなことが政治的な思惑も含めて報道に出たことを、東電側が多少後でフォローするために、武黒さんがやめろと言ったとか、結局入れ続けたとか、そういう話になっているような気はしますが。どちらが事実かわかりません。

司会 わかりました。私からは最後の質問ですが、今回の原発事故に対する総理以下閣僚、政府高官、省庁のスタッフの一連の対応をどういうふうに評価されますか。何が一番評価できるか。また、今から見て何が一番問題だったのでしょうか。

福山 評価するのは、私の上司ですからあまり言うてはいけないのかもしれませんが、14日の夜中に撤退を東電が言ってきたときに、東電を撤退させないという決断を総理がしたことは、私はやっぱり一定評価されてしかるべきだと思います。これは夜中の午前3時に、官房長官と経産大臣両方に東電側から連絡があって、撤退をしないと。我々だけでは決められないので、総理に午前3時に執務室に集まってもらって、これは政治だけで議論しました。当時は藤井官房副長官も官邸にいらっしゃって、松本防災担当大臣を寄宿舎から呼び寄せて政務だけで議論したときに、総理はどなっています、そんなことはあり得ないと。作業を止めてほったらかしたら1号機、2号機、3号機はどうなるんだと。4号機の使用済みプールをほったらかすのかと。このまま水を入れるのもやめて放置して放射性物質がどんどん出続けたら、東日本全体がおかしくなる。そんなことはあり得ないと。

最悪の場合には、決死隊をつくってでも作業を続けると。65歳以上の人間ならば、多少放射性物質がかかっても、もう子供もつくだらう。最悪は自分が先頭切ってでも行かなければいけない。だから、今から東電を呼んでそのことを伝えようと言って、午前4時に清水社長に来ていただくというのが経緯です。清水社長にも決してどなってなくて、一言だけ「撤退などあり得ません」と総理が言ったら、清水社長は「はい」とおっしゃられた。その後、先ほどからの話でご案内のように意思疎通、情報伝達については我々自身も申しわけありませんが、はなはだ不信感もありましたので、我々の午前3時からの会議のときに総理が細野さんに、「細野君、悪いけど、君は東電のほうに常駐してくれ」と。で、秘書官を呼んで、法律的にそれが可能かどうかということを確認して清水社長に来ていただきました。清水社長に、「これから細野君を東電に常駐させるから、机を用意してくれ」と。今から自分は乗り込むから、何時間後に用意ができるかと言ったら、清水会長がちょっと驚かれた顔をされたんですけど、「はい、わかりました」と。

ここの記憶はぼくはいいかげんなんですけど、1時間半か2時間とおっしゃったんです。そうしたら、総理がそんな時間はありませんと。30分後に私たちが行きますから、ぜひその準備をしてください。じゃ、お引き取りくださいと言って、清水社長を東電に戻しました。で、僕らは30分後に総理と一緒に東電に駆け込んで、そこで総理が、東日本がこのま

まではつぶれるし、東電もつぶれる。とにかくしっかりやってくれと。それは政治家ですから、東電でオペレーションをされている100人ぐらいのスタッフを前に、マイクを通じてかなり強めに言われましたが、それが事の実態だと思っています。

その後、直後にサブプレッションチェンバーが爆発したりして、その後が本当に放射性物質がたくさん放出される状況になるんですけども、そのオペレーションを誤解を恐れずに申し上げれば、作業されている方の命のリスクがあることを我々も重々わかっておりました。見殺しにする気は全くありませんでしたが、しかし、それと比較衡量した上で、とにかく当時はまだ爆発するかもしれないと思っておりましたので、やはり最悪、放射性物質が東日本全体に放出されることを回避するほうが大きいと判断された。これはなかなか厳しい判断だったと思いますが、撤退をしない、作業を続けると決めたときの総理は、一定の評価があつてしかるべきだと思っています。

ただ、反省点で申し上げれば、すべて初動からです。例えば原発事故がどういう状況から起こって、どういうことが想定されるのかなんていうのは、あの当時ばくも官邸に半年ぐらいいましたが、全く防災関係の事前レクなどありませんでした。もちろん1回、9月1日に防災訓練をやっていましたが、そんな議論はありませんでした。現実に保安院がどういう役割・機能を果たしているのかも、正直申し上げてあまり我々の中では認識がありませんでした。ですから、初動はこの人たちはプロなんだから、それこそ財務省とか経産省も含めて、きちっとある程度状況が把握された上で、こちらに上がってくるものだと思っていたところに大きな間違いがあつたような気がします。そこは反省材料だと思っています。じゃ、何があれば何を回避できたのか。私はずっと震災後1月ぐらい、夜ほとんど寝なかつたんです。ほとんど官邸に寝泊まりしてましたので、夜寝るときに必ず自問自答するわけです。何ができたか、何の判断があつたか、ほかに選択肢はなかつたかずっと考えるんですが、なかなか出てこないんですね。それは自分らのやってきたことがまともだとか、正当性があるということを言いたいわけでは決してありません。

ほかに何らかの選択肢があつたのかといったときに、じゃ、今のメルトダウンをどこでとめられたのかと考えたときに、よくわからないんです。ほかの選択肢ならメルトダウンがとめられたのか。ベントがもっと早くできた可能性があつたのか。そこは皆さんが専門性をもって検証される中で、逆にサジェスションをいただければ非常にありがたいと思っています。

司会 ありがとうございます。最後に1問だけ、どなたか、どうぞ。

出席者2 今日はありがとうございます。一つお聞きしたいのは、菅総理が現地に乗り込まれるときの意思決定の状況ですが、福山先生も恐らくその場におられたと思いますが、まずどういう理由で現場に行かれようと思われたのか。それから、その中でどのような材料を判断材料にして、行く行かないのコストベネフィットの計算の中で、行かれるというご判断をされたのか。

福山 1点目は、まず行かれたのは、福島を第一に想定したわけではありません。三陸沖

なりの津波の状況を把握したかったというのが実態です。総理の気持ちとして言えば、真っ暗で日が暮れた状況で3月11日から12日になりました。もちろん原発事故を横目で見ながらですけども、津波の被害の状況が見えないと。現地を見たいけれども真っ暗だと。だから、一番早く見られるのは明け方、日が上がったところだと。すぐに帰ってくる分には、午前中のオペレーションから何とかなるというのが総理の頭の中にはもちろんありました。さらに言えば、一回官邸に入ってしまうと、もう出る場面はそうないだろうということもあったので、上空からだけでも東北の地震の現場を見ておきたいというのが総理の中でありました。2点目は、結果としてベントがずっと遅れたことによって、さっき申し上げたように吉田所長と直接なかなかやれないんです。総理は吉田所長と直接やって、現場の状況を把握した上で、オペレーションをしたいという思いが強かったので、福島にも寄りたいたいという話になりました。これはなかなか難しいんですけど、当初は総理と、海江田大臣も福島のことがあるから行きたいとおっしゃったんです。これは官房長官と私が、とにかく海江田大臣はいてくれと言って、結構内々に海江田大臣には官房長官から説得していただきました。これは2人とも離れるのはまずいという判断をしました。

官邸のオペレーションは、少なくとも官房長官がいるから大丈夫だと。原発のオペレーションは所管大臣がいる。だから、総理にはとにかく現場を見てもらって、早く帰ってきてもらうという判断をしました。難しかったのは、総理が現実には現場を見たいと言っているときに、なかなかとめにくいというのはありました。やめたほうがいいんじゃないかという声もありました。それも総理に伝えました。ただ、結果として見てもらおうというのと、原発事故でベントが行われないと。僕らは、そのときから大分不信感がたまっていたので、現実には本人が行きたいとおっしゃるんだったら、そこは行って、じかにやってもらおうという判断をしたというのが実際のところです。

司会 福山さん、今日は本当にありがとうございました。丸々2時間みっちりとブリーフしていただきまして、感謝しております。福山さんは、今日皆さんも聞かれたようにものすごい記憶力なんです。それと再現力といいますか、新聞記者にしたら理想の取材先です。しかもメモまでつけていらっしゃる。それもねらいたいなと思いました。

福山 ご清聴いただきまして、どうもありがとうございました。